

受付番号

--

留学・研究計画書

氏名 金 宇大	留学機関名 慶北大学校
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2011 年 4 月 ~ 2013 年 3 月
研究テーマ 古代東アジア世界における朝鮮諸国と倭の相互交渉研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>古代の東アジア諸地域は、中国王朝の冊封体制を中心とする「東アジア世界」という文化圏の中で、それぞれ相互関連的に発展してきた。本研究では、こうした古代東アジア世界における文化的相互交渉の具体相の一端を明らかにするために、東アジア世界の中でも日本列島と朝鮮半島という地域に着目して、西暦5・6世紀における当該地域間の相互交渉の様相を考古学的な手法により解明することを目指す。</p> <p>従来、古代の日韓関係史は、主に文献史学の分野から研究が蓄積されてきたが、近年では文献史料のみからのアプローチは、史料の制約から限界を迎えつつある。一方で、考古資料の蓄積は、土地開発にともなう発掘調査などによって日韓両国で継続的になされており、とりわけ韓国では、1990年代以降の発掘調査件数の増加にともなって、良好な考古資料が飛躍的に増えた。考古学的方法には、文献史料には書き記されない具体的な人間の営みを復元するという長所があり、歴史学とは違った切り口から当時の状況を復元できる。実際に、考古学的方法によって、文献史学の分野からはなしえない新たな成果も蓄積されはじめている。</p> <p>研究は、遺物の実見観察による製作技術の比較検討という方法を軸にし、「金工品」と「土器」という性質の異なる2種の出土品を対象におこなう。前者の金工品とは、金や銀といった貴金属の加工によって装飾を施した器物のことである。申請者は、修士論文を『装飾付環頭大刀の系譜と技術伝播』というテーマで作成した。これは、日本列島と朝鮮半島の両地域の墳墓に副葬された刀、それも外装部分を華美に装飾した「装飾付大刀」を検討し、大刀の流通状況と、製作に用いられた技術的特徴の伝播の様相とを比較しながら、当時の相互交渉の一端の解明を試みたものである。こうした「装飾付大刀」のほか、耳飾りや冠といった種々の金工品は、原材料の金や銀を入手することが困難であること、それらの加工に極めて高度な技術が必要とされることなどから、強力な権力基盤をもつ集団のみが製作をおこない得たと考えられ、その流通には、政治的な意図が色濃く反映されているものとみられる。こうした意味において、金工品の分析は、当時の「国」と「国」による政治的な交流の実相に迫る一つの方法といえる。</p> <p>一方、生活用具である土器は、各地域の集団内で製作されたと想定できる器物である。そのため、土器の流通は、地域集団同士の局所的な交流に起因する可能性が高い。したがって、土器の分析からは、権力中枢を介さない特定地域間の局所的交流という、まったく異なる次元の交流の様相を明らかにすることができる。金工品の分析に加えて土器の分析をおこなうことで、当時の両地域における相互交渉の在り方を重層的に浮き彫りにしていくことが可能となる。</p> <p>本研究は、日本列島および朝鮮半島諸国の文化的領域がそれぞれどのような広がりを見せていたのか、そして、文化的な交流が当時どのようなようになっていたのかということを明らかにする試みに他ならない。未だに「遠くて近い国」とされる日韓両国間の密接な文化的関わりを、文献史学の範疇を超えた考古学的方法によって具体的にしていくことは、社会的に寄与するところの極めて大きな作業であると考えられる。</p>	

成果報告書

記入日 2013年 4月 14日

氏名 金宇大	留学先国名 大韓民国	所属機関 慶北大学校考古人類学科
研究テーマ：古代東アジア世界における朝鮮諸国と倭の相互交渉研究		
留学期間： 2011年 3月 ～ 2013年 3月		
<p>2年間にわたる留学中は、博士課程の講義を受講して単位を取得しつつ、研究に必要な文献資料の収集と、全国の国立博物館や大学博物館、発掘機関などで収蔵されている出土遺物の実見資料調査の実施を中心に研究活動をおこなった。また、研究成果をまとめた論文を投稿したり、各地で開かれる学会への参加、現地での発掘調査への参加など、できる限り積極的に韓国での学術活動に加わった。</p> <p>博士課程の授業は、1学期に受講できる最高の3コマを最大限に受講し、2年間で36単位を取得、課程を修了して博士論文の提出要件を満たした。講義は、考古学のみならず文献史学の立場から研究対象時期を扱ったものも受講し、韓国内における学際的な研究状況を詳しく把握することができた。</p> <p>一方で、研究対象時期に関する報告書や論文などといった文献資料を集めるため、発掘調査報告書を刊行している各機関に連絡をして、可能な限り報告書の原本を取り寄せた。現時点では入手が困難なものについても、必要箇所をコピーして整理し、日本に戻ってから万全な資料状況で研究を続けていく上で必須となる文献をほぼ蒐集することができた。</p> <p>本研究の骨子である考古資料の実見調査については、2年間で述べ63回の調査を実施し、資料の図化と1万枚以上におよぶ細部写真を撮影した。また、金属製品を精密に図化できる研究者は、韓国ではまだ限られているため、発掘機関からの依頼を受けて報告書執筆作業にもかかわり、3冊の発掘調査報告書に実測図面と報告文を執筆・提供した。</p> <p>こうした集めた基礎的データは、その都度まとめて論文を作成し、現地でこれを投稿した。2011年11月に発行された査読雑誌『嶺南考古学』に投稿した「製作技法を中心にみた百済・加耶の装飾大刀」と題する論文では、朝鮮半島南西部で出土する朝鮮三国時代の装飾大刀を製作技術面から検討し、従来区別が困難とされてきた加耶製の大刀と百済製の大刀の峻別基準を明らかにすることで、当時の大刀の流通様相や製作技術の伝播状況をより具体的に把握し、両地域の関係をより明確にした。この論文は、近いうちに日本語翻訳版が日本で発表される予定である。</p> <p>2012年9月に慶尚北道文化財研究院から刊行された発掘報告書『義城大里里二号墳Ⅱ』には、「朝鮮半島出土円頭・圭頭大刀の系譜」と題する論考を掲載した。これは、朝鮮三国時代における装飾大刀の中でも類例が少なく、それ故にこれまで体系的に検討されることがなかった円頭大刀および圭頭大刀を地域を超えて網羅的に集成・分析し、各地域ごとの製作技法の差異を明らかにしつつ、それらの影響関係について言及したものである。円頭大刀は、日本列島での出土例が多く、朝鮮半島に起源をもつもの</p>		

という指摘が古くからなされていたが、これまで朝鮮半島での資料状況を体系的に整理した研究はなされてこなかった。その点で、日本列島の資料を検討し、朝鮮半島との関係性に言及するための基礎研究として位置付けられる。

2013年4月には、世宗文化財研究院から『順興台状里古墳群』という発掘調査報告書が刊行されるが、これに「台庄里1号墳出土垂飾付耳飾の製作技法とその評価」と題した論考を投稿した。これまで装飾大刀を対象とした研究をおこなってきたが、初めて朝鮮三国時代の耳飾を対象とした検討を試みたものである。これは、台状里1号墳から出土した耳飾を製作技術面から位置づけつつ、新羅でつくられた耳飾の類例を集成し、同様の耳飾が全体としてどのように時期的変化をしていくのかということ論じたものである。三国時代において、耳飾は普遍的な副葬品として、全国の墳墓から出土するが、とりわけ新羅はその数が膨大で、その資料状況がまだ十分に整理・把握されていない。現在、新羅の耳飾を総合的に分析した論文を執筆中で、6月までに現地の査読雑誌に投稿する予定である。

また、論文の翻訳作業にも従事した。2013年春に金属工芸研究所から刊行予定の『文化財と技術』第5号に掲載される咸舜燮「新羅樹枝形帯冠の展開過程研究」の翻訳、および同誌掲載の金跳咏「大加耶龍鳳文環頭大刀外環の製作方法と復元実験」の翻訳監修をおこなった。これらの論文は、冠や大刀といった墳墓出土の金工品に、製作技術面からの検討を極めて詳細に加えたもので、日本の学界に資するところが大きな論考であると判断される。

このように、本研究において目指した、考古遺物、とりわけ金工品と土器の分析に基づく古代東アジアにおける相互交渉へのアプローチは、当初予定していたよりも金工品の分析を深くおこなうことになってしまったため、依然、土器の分析を本格的に開始するには至っていない。しかし、金工品の検討については、ほぼ研究の見通しを立てることができた。特に、朝鮮半島の出土資料については、資料の集成を完了し、実見調査もかなりの段階まで進めることができたので、今後必要に応じて韓国での追加調査を実施しつつ、日本列島出土資料との関係を積極的に検討していく予定である。

一方、こうした博士論文作成を視野に入れた研究とはまた別途に、現地の研究者との交流や、韓国考古学の実情、調査の方法などを知るため、発掘調査や学会などに参与してきた。2012年7月から9月初頭まで、慶尚南道金海市にある大成洞古墳群の発掘調査に加わって、現地の調査員や学生らと一緒に実際に古墳を発掘した。2ヵ月間の調査を通じて、一次資料を自らの手で掘り出すということの重要性を再認識するとともに、海外で専門的な用語を駆使して精密な発掘調査をすることの難しさや、日本と韓国での調査方法の具体的な違いを体験として学んだ。なお、発掘調査では、日本列島から持ち込まれたと考えられる装飾品などが出土したほか、中国から搬入されたとみられる金銅製品なども出土し、韓国の学界において、大きな話題となった。このような重要遺物を掘り出すことができたことは、自身の視野を広めただけでなく、全国各地から見学に来る研究者らと知り合える好機ともなった。

また、通訳としてたびたび国際シンポジウムに参加し、壇上で発表をサポートした。韓国人研究者の発表を日本語に訳すだけでなく、日本人研究者の発表を韓国語に訳すという作業も経験し、専門的内容の発表を翻訳する困難さを痛感し、留学終了後の継続的な韓国語の勉強の必要性を改めて感じた。